6 ヤマトタケルの伝承とヤマト政権の東海支配

～記紀から探る～

1　ヤマト政権の勢力拡大

ヤマト政権は、５世紀後半から６世紀にかけて、大王を中心とした政権を確立し、東北地方中部から九州地方中部に及ぶ支配領域を形成した。ヤマト政権が勢力を拡大する過程には、６世紀初めの磐井の乱など地方における首長層による抵抗がみられる。だが、支配地域は徐々に拡大し、前方後円墳などが築造され、ヤマト政権の支配下に組み込まれたことを示している。

静岡県におけるヤマト政権の支配は、県内の前方後円墳などの築造との関連から４世紀頃と考えられている。これは、磐田市の松林山古墳や銚子塚古墳、静岡市の谷津山古墳など全長100mを超える大型の前方後円墳の存在から実証される。一方、文字資料としては、『古事記』や『日本書紀』（以後、記紀とする）にみられるヤマトタケルの伝承が有名である。この伝承は、史実より物語としての要素の強いものであるが、この文字資料から静岡県におけるヤマト政権の勢力拡大の過程について考えていきたい。

〈史料１〉は、『日本書紀』景行天皇四十年是歳条の、ヤマトタケルが駿河で敵に欺かれ野原に連れ出されて焼き討ちにあうが、火打ち石で向火をつけて難を逃れたとする有名な説話である。欺かれたことを知ったヤマトタケルは、敵を焼き滅ぼしたので、この地が「焼津」とよばれたことや、身につけていた剣が自然に鞘から抜け、草を薙ぎ払ったので、その剣を「草薙」と名付けた地名起源説話を伝えている。この地名は、現在の焼津市や静岡市草薙であると考えられ、静岡県とつながりが非常に深いものである。

〈史料１〉

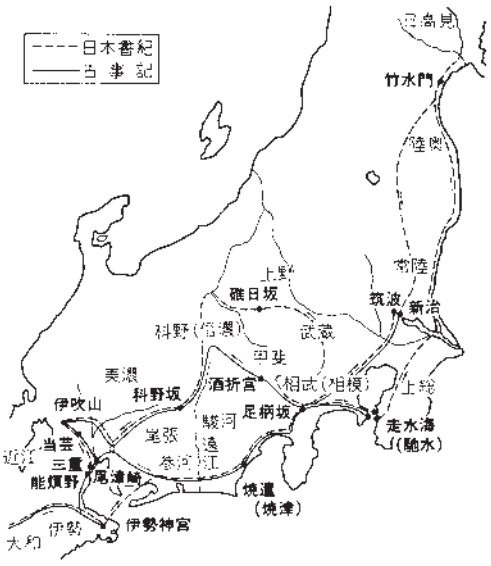
日本武尊、初めて駿河に至る。其の処の賊、陽り従ひて、欺きて曰さく、「是の野に、麋鹿甚だ多し。気は朝霧の如く、足は茂林の如し。臨して狩りたまへ」とまうす。日本武尊、其の言を信けたまひて、野の中に入りて覓獣したまふ。賊、王を殺さむといふ情有りて王とは、日本武尊を謂ふぞ。其の野に放火焼。王、欺かれぬと知しめして、即ち燧を以て火を出して、向焼けて免るること得たまふ。一に去はく、王の所佩せる剣、叢雲、自ら抽けて、王の傍の草を薙ぎ攘ふ。是に因りて免るること得たまふ。故、其の剣を号づけ草薙と曰ふといふ。叢雲、此を茂羅玖毛と云ふ。王の曰はく、「殆に欺かれぬ」とのたまふ。則ち悉に其の賊衆を焚きて滅しつ。故、其の処を号けて焼津と曰ふ。〔後略〕

（『静岡県史』資料編４古代　14頁）

ヤマトタケルは、景行天皇の皇子であり、天皇の命に従わない兄を殺害するなど勇猛な性格で知られ、天皇から西方のクマソタケル兄弟の征討を命じられ、これを討伐してヤマトタケルの名が献じられている。西方征討から還ったヤマトタケルは、すぐに天皇から東方征討を命じられ、東国へ向かうこととなる。この途中に伊勢神宮を参拝し、叔母の倭比売命に会い、「父は、私に死ねと思っているのではないか」と憂い泣いたことが『古事記』には記され、物語の要素を強く残している。この時、倭比売命から〈史料１〉の説話で活躍をする火打ち石と剣を授かっている。〈図１〉は、ヤマトタケルの東方征討の経路であり、記紀による違いはあるが、〈史料１〉の場面の後、相模から上総に渡り東国平定を終え、甲斐国酒折宮や尾張を経て、伊吹山での征討の時に病気となり、伊勢の能煩野で亡くなっている。

ヤマトタケルの伝承は、実在した個人の説話ではなく、ヤマト政権が武力制圧により政治的な支配を拡大していく歴史的な過程を、一人の伝説的な英雄の物語として伝えたものであると考えられる。このようなヤマトタケルの伝承とヤマト政権の勢力拡大過程の関連を考慮し、〈史料１〉の伝承における記紀の記述の違いに注目してみると次のようなことがわかってくる。

〈図１〉ヤマトタケル東征経路



『静岡県史』通史編１原始・古代　346頁より

２　『古事記』と『日本書紀』の記述の違い

〈史料１〉の伝承における記述の大きな違いは、第１に伝承の場所が『日本書紀』は駿河であるのに対し、『古事記』では相模としている点である。『古事記』（長文のため史料の引用はしなかった）では、焼津や草薙の起源説話の場所を相模として記述しているが、これは地理的に駿河とする方が妥当である。この場所の違いは、『古事記』が相模以東を東国として意識しているのに対し、『日本書紀』では、ヤマト政権の東方征討の初めに駿河において在地勢力の強い抵抗があったとする伝承を反映したものと考えられる。

また、記述の第２の違いは、ヤマトタケルを焼津で欺いた敵を、『古事記』では「国造（くにのみやつこ）」としている点である。国造は、ヤマト政権が政治支配を拡大する過程において、支配下に入った在地の首長層などを任命したものである。焼津で抵抗した在地勢力を国造とすることは、国造制の成立期の問題などから疑問ではあるが、この在地勢力は国造に相当するような勢力であったことが伝承に反映されたのではないか。『古事記』は、国造がヤマト政権に抵抗したことを伝えるのに対して、国の公式な歴史書である『日本書紀』では、「賊（あた）」としか記述していない点は注目すべきである。

３　ヤマト政権の勢力拡大

『宋書（そうじょ）』倭国伝（わこくでん）には、478年に倭王の武（ぶ）（雄略（ゆうりゃく）天皇と考えられる）が宋に使者を派遣したことが記されている。この使者が報告した上表文（じょうひょうぶん）では、ヤマト政権の統一の様子を「躬（みずか）ら甲冑（かっちゅう）を擐（つらぬ）き、山川を跋渉（ばっしょう）して寧処（ねいしょ）に遑（いとま）あらず」と述べている。上表文に述べられた征討の様子は、西へ東へと地方の征討に奔走するヤマトタケルの伝承と同じである。ヤマト政権は、『宋書』倭国伝の上表文や、記紀のヤマトタケルの伝承にみられるように、地方の征討を繰り返すことにより、支配地域を拡大していったことがわかる。また、静岡県におけるヤマトタケルの伝承について記紀を比較検討すると、駿河で国造に相当するような在地勢力の激しい抵抗があり、この抵抗がヤマトタケルの伝承に反映されて記紀に伝わったと考えられる。

〈参考文献〉
『静岡県史』通史編１原始・古代　第２編第１章第１節
上田正昭『日本武尊』（吉川弘文館）
原秀三郎『地域と王権の古代史学』（塙書房）